硬刃無双ＧＵＮ＝ＪＯＥＳ　ノベライズ冒頭部

――――――――――――――『喰イ千切レ』

その短い叫びが、少女の記憶の根源だった。
誰が言った言葉なのかは覚えていない。
如何なる状況で吐き出された言葉なのかも覚えていない。
言葉の意味は解っているが、言葉の意図は分からない。
それでも――
それでも、その叫びは少女の心の支えであり、今後もそう在り続けるのだろう。

――――――――――――――『喰イ破レ』

その静かな呟きが、男に残る唯一の感情らしきものだった。
自分の言葉なのかもしれないが、確実な事は何一つ記憶に無い。
現在の彼にとって、その言葉に意味はない。
ただ、そこに宿る僅かな感情だけが彼の存在の支えだった。
しかし、籠められた感情が怒りなのか悲しみなのか、あるいは愛と呼ばれるものか。
感情を消した男には、それすらもう、解らない。

壊れてしまった少女の過去。
無くしてしまった男の今。
二人は親子だったのかもしれないし、恋人同士だったのかもしれないし、同一人物だったのかもしれない。
彼ら自身にすら、真実は解らない。
既に人生の目的すら忘れた身ではあるが、それでも彼らは蠢き続ける。
幾億もの壁を食い破り、果て無き逃亡を続け――ただ、見た事も無いどこかに辿り着く為に。

彼らは、今日も次元の壁を食い破る。

一章『腐肉仕掛けの人形』

閃光。
光に包まれた巨大な人型が、戦場の空を飛んでいる。
それは深い霧に包まれ、地上からはただの陰としてしか認識できない。
時折激しく輝くその人型だが、地上の人々はその光景に気付かない。

地上にいる者達の視線に映るのは、目の前に満ちる圧倒的な死の行進。
象の群のように、鉛色の戦車が霧に満ちた大地を蹂躙する。
塹壕の周囲に群がる兵士達が、火炎放射器で穴蔵の中の敵兵達を掃討する。
その炎の隙間から投げられたたった一つの手榴弾が、互いの生と死を逆転させる。
だが、如何なる逆転劇が起ころうとも、生者の数が増える事は無い。
あまりにも激しく、死が戦場を埋め尽くす。
全て殺し尽くしたのではないかという虐殺を見物するかのように、巨大な陰は閃光を纏いながら戦場の空を舞い――
自らもまた、死の臭いに晒されていた。

巨影を時折光らせる閃光は、『それ』の背後に迫る別の巨影によるものだった。
小さな光の線が霧を突き抜けたかと思うと、次の瞬間には巨影の体を貫き――轟音と共に飛散する。
地上からそれを見上げる者がいたとすれば、それは空を飛ぶ巨人の狩りに見えた事だろう。
もっとも、狩られる側も同じ巨人ではあるのだが。
光の線の一つが地上に落ち、圧倒的な熱の拡散と共に無数の命が吹き飛んだ。
だが、そのすぐ周囲に居た者達にとっては、戦車砲の一撃が来たとしか判断できない。それが砲弾とは違うと近くで視認できた者は全て炭化し、遠くから見ていた者はそれが何かを気にしている暇などない状況だった。

そんな地獄を見下ろす上空の霧の中に、状況に全く似付かわしくない声が響く。
「見て見てクロース！　下、人が沢山死んでるよ！　大変だね！　下の人達大変だね！」
対岸の火事を眺めるように騒ぎ立てるのは、無邪気な色に満ちた少女の声色。
誰かに問いかけているようだが、それに返答する声は無い。
「あんなに死んじゃって、残った人達寂しくならないのかな？　私があと１００００万体居ればあの人達の代わりになる？　ならない？」

場の空気を読まぬ声に対し、そこでようやく答えが返る。
「無理だな」
少女のすぐ側から低い男の声が響き、無感情に少女の問いを斬り捨てた。
「そっか！　残念だね。死んじゃうって残念だねえ」
「死への観念は人それぞれだ。一方的に決めつけるな」
「そっか！　じゃあ大丈夫だね！　よくわかんないけど大丈夫だねえ！」
彼女に悪意はなく、優越巻もない。
もしもその光景の全てを見通し、少女の声を聞いていた者がいたとすれば――流れ弾を地上に落とした巨人の独り言のように聞こえた事だろう。
安全な位置から地上の生と死を見下す発言に聞こえるだろう。
だが、実際は少し違っていた。
無邪気な声を出す少女もまた、死に追われていたからだ。
彼女達の声は、確かに空を舞う巨影の内部に響いていたのだが――
それは、今まさに攻撃を受けている、閃光に沈みつつある影の方なのだから。

「アハ！　ヒハハッ！　駄目かな？　ねえ、もう駄目かな？」
「さてな」
「ヒハッ！
「それでもトぶよ！　駄目でもトぶよ！　１０回ぐらい連続でトべば逃げ切れるんじゃないかな！　ヒハハハッ！」
「今日の追っ手は、それほど甘く無さそうだが」
少女の声には悲愴感はなく、男の声には感情が無い。
空を舞う巨影は背後からの攻撃を浴び続け、徐々に全体の揺らぎが大きくなっていく。
あと数回光の線を浴びれば、恐らくは壊滅的な状況となる事だろう。
そして、後方から迫る狩人側の巨影が、狙い澄ました一撃を放とうとした瞬間――
一際大きい轟音と共に、桁外れの閃光が戦場全体を照らし出した。
地上で死のやり取りをしている兵士達は、そこで初めて空の霧の中を舞う『異形』達の姿を認識したが――次の瞬間には、巨影は周囲の霧を道連れにその姿を消していた。
霧に遮られていた空の一部に大きな穴が開き、邪魔者の居なくなった太陽が燦然と戦場を照らし出す。
次の瞬間、もう一方の巨影も光を放ち、日光の中に溶け込むようにその姿を掻き消した。
地上の兵士達は暫しその光景に呆然としてたが――変わらず走り続ける戦車のキャタピラ音で我に返り、再び大地を血煙で埋め尽くす。

上空で殺し合う巨人達など、彼らに。

∞

「アハハハァ！　トベ！　トベ！　トベ！　トベぇッ！」

半狂乱に笑う少女の叫びと共に、巨影は何度も光に包まれる。

眩い光の合間に、様々な光景が見える。

宇宙に浮かぶ巨大な生活モジュール。

平原を規律正しくと埋め尽くす長槍兵の大集団。

高層ビルに埋め尽くされた砂漠の都市。

人の痕跡など何一つ無い、灼熱のマグマに沈んだ星。

建設途中のピラミッド。

竜の背に跨った武将達が往来する万里の長城の上空。

シャーマンの儀式に祈りを捧げる古代人達。

犬と猫が戦争する世界。

起動エレベーターの周りで、緑色の肌をした人間達が行っている盛大な祭。

脈絡の無い光景が、光と光の合間に割り込んでくる。

そして、少女の視界が１０回目の閃光に包まれた瞬間――

光の中に、一つの巨影が浮かび上がる。

先刻、戦場の上で少女達を攻撃していた存在と、寸分違わず同じシルエット。

「あれー？　追いつかれちゃっ……」

少女が最後まで呟くよりも先に、眼前の巨影から赤い光が放たれ――

周囲を包み込んでいた閃光が突然消え去り、緑色の山が少女達の視界に現れる。
「世界の壁ごと切り裂いたか。無茶をする」
淡々と呟く男の声に、少女はやはり笑いながら言葉を返す。
「もしかしたら私達死んじゃうね！　あの山も死んじゃうね！　寂しいね！　ヒハハッ！」

壊れた人形のように笑い叫ぶ少女。
だが、彼女の言葉
『世界の壁』とやらを切り裂いた不気味な衝撃は、転送先の土地を一つ殺すには充分過ぎる物だった。

そして――巨影は空中で半壊しながら一つの世界に墜落した。
この世界がどのような場所なのか、それを理解する暇もなく。
少女も男も、彼らを落とした敵も、当の世界に住まう住人達でさえ――
ここがどのような世界なのか、正確に認識している者はいなかったのだ。

∞

天保一九年（西暦１５５０年）夏　日本某所

その山は、滑った空気に満ちていた。
普段ならば、その身にまとわりつくのは空気の重さではなく、四方から聞こえる蝉の声の筈だった。
だが、現在の山には、蝉は疎か、木々のざわめきさえも消え失せている。
風一つ吹かぬ緑の薄闇の中、雄弁に己を主張するものは――草を掻き分ける人間の足音。
「……」
足音の主である少年は、無言のまま歩を進める。
年の頃は１５、６といった所だろうか。
幼さが僅かに残る顔だが、精悍な眼差しがその若さを打ち消している。
剃髪はしていないが、一部の髪を伸ばして後ろで束ね、散切り頭の後部に簡易的な髷を取り繕っている。腰に刺した刀や草履といい、いかにも武士の時代の人間という出で立ちだが――
その雰囲気は、侍よりも寧ろ、洒落っ気のある山賊の幹部のように感じられる。
肌を撫でる重い空気も、その空気すら凍らせるような静寂にも、少年は欠片も怯まない。
ただ、山の奥へ。
迷いの無い足取りで、少年は沈黙の奥へと進み続ける。

そして、山の奥、普通は人が近づく事の無いような谷間に辿り着いた時――
少年は、そこにあったモノを見て一言だけ呟いた。

「これは良い」

彼の目の前にあったものは、異形の鎧。
ちょっとした城ほどの大きさを誇る、巨大な金属の塊だ。
『それ』について全く知識が無い少年にも、それが大破しているという事は理解できる。
本来一つだったであろう部品が、巨大な人型の塊を中心として谷の中に散乱していた。
見ようによっては巨人の纏う鎧と思えるその物体に、少年は物怖じもせず近づき、自分の数十倍はあろうかという『腕』らしき部分に触れようとしたのだが――

「うれしそうだねぇ。ヒヒッ」

と、その腕の影から若い女の声が響き、少年は腕を止めて声の方向に視線を向ける。
すると、丁度巨人の鎧の胸の部分に押しつぶされている少女の姿を見つけた。
上半身だけを鉄の塊の下から覗かせ、右腕の肘から先が、すぐ側の地面に千切れ落ちている。
年の頃は、少年より少し年下といった所だろうか。
だが、正確な年齢は解らない。
年齢だけではなく、少女が人間なのかどうかも解らない。彼女の髪と目は深い青色に染まっており、見た事もない奇妙な衣服を纏っている。なによりも、彼女の千切れた腕から覗くのは赤い肉ではなく、黒と白の糸や藁のように細い筒。そして、その断面からは少女の髪の色と同じ青色の液体がしたたり落ちていたのだから。
そもそも、押しつぶされているという状況からして、少女の年齢や正体など気にしている事態ではないはずなのだが――少年は静かに少女の前まで歩み寄ると、しゃがみ込んでその顔をまじまじと見やる。
「小童（こわっぱ）、貴様も潰れている割には嬉しそうだな」
動じた様子もなく尋ねかけると、少女はニカリと顔を輝かせ、玩具を与えられた子供のような声をあげる。
「ああ、この言葉で通じたね！　外見からして日本の江戸かその少し前ぐらいの時代だと思うけど、一回目の言語調整でこんなに綺麗に通じると嬉しいよね！　ヒヒッ！　えーっと、発音からしてオワリの方の人かな？　でも尾張弁じゃないんだね。エヘヘ」
「何を言っているのか解らんが、身を案じる必要も無さそうだな。貴様はモノノケか山神の類

か？　この山に天狗が出るなどという話は聞いた事も無いが」
　どこか楽しげに尋ねる男を前に、少女はケラケラと笑いながら問いかけた。
「モノノケだったらどうする？　ねえねえ、どうしちゃう？　やっぱりその刀で真っ二つにして殺しちゃうの？　私の事！　ヒハッ！」
「殺して欲しいのか？　貴様は顔色もいい。介錯が必要なようには見えんが」
「アハハ！　変なお兄さん！　……あれ？　でも、私、お兄さんの事、見覚えあるかも」
　突然真顔になって呟く少女だったが、少年は薄く笑いながら首を傾げる。
「すまんな。俺には覚えがない。人の顔を覚えるのは苦手だが、貴様の髪の色なら一度会えば忘れる事もあるまい」
「ふーん？　まあいいや！　ところで、なんでうれしそうなの？　何かいい事あった？」
　イヒ、と、妙な笑いを漏らす少女に、少年は静かに立ち上がり――眼前の巨大な鎧を見上げて呟いた。
「なに、今朝方、星が落ちて山が死んだと聞いてな。皆が気味悪がって立ち入ろうともせんので見に来たんだが、これほど変わったものが見れたのだ。山一つの価値はある」
　目を輝かせて鎧を見上げる少年に、少女は再びケヒヒと笑う。
「変な人だね、お兄さん」
「ところで、貴様は結局何者だ？　この馬鹿げた絡繰人形と関わりがあるのか？」
「ヒヒッ！　私は狸で、お兄さんを化かしてるのかもしれないよ？　眉毛に唾つけてみたら？」
「それならそれで構わん。狸と喋るのは初めてだからな」
　少年はそう言いながら、巨大な絡繰の周りを歩き始める。
　すると、絡繰りの裏側――少女が潰れている場所から反対となる場所で、別の人影が倒れているのを発見した。
　熊を思わせる巨体。
　年齢は４０前後といった所だろう。
　黒い衣服を纏っており、外見は普通の人間のようで、短く刈り込んだ黒い髪と相まって、たまたま山の死に巻き込まれた修験者かと思える程だった。
　その推測が誤りだと判断したのは、男の黒い服の意匠が、やはり少年の知るものとだいぶ違う、どちらかというと青髪の少女に近いものだったからだ。
「ふむ」
　近づいて見ると、どうやらまだ息はあるようだ。
　少年がペチペチと男の頬を叩くと、男はゆっくりと目を開く。
「……――――、――」
　男の口から漏れ出たのは、少年の聞いた事のない言語だった。
　ただ、その言葉は譫言などではなく、割合ハッキリした意識のものだったのだが――感情ら

しきものは感じられない。
その小さな呟きを聞き取ったのか、絡繰の壁の裏側から、少女の声が響き渡る。
「あー！　アハハッ！　クロース！　生きてたんだね！　嬉しいね！　良かったね！　アハ！」
「……ササメ」
「ほう、あの娘の名はササメ（ひそひそ話）で、貴様は黒臼（くろうす）か。確かに貴様の体格は、黒い臼に見えるな」
その声を聞いて更に意識を覚醒させたのか、男は少年の存在にも気付き、ゆっくりと顔を向けて呟いた。
「……その言葉と君の外見から、ここが中世から近世にかけての日本だと判断する」
突然自分に通じる言葉を吐き出した男に、少年は溜息を吐きながら首を振る。
「堅苦しい物言いの上に何を言っているのかよく解らんな。異人とも少し違うようだが、貴様らは一体何者だ？」
明らかに年上である男に対しても、尊大な口調を崩さずに問いかける少年。
男はそれに対して不機嫌になった様子もなく、無表情のまま首を静かに傾ける。
「失礼をする。まだ自己修復が完全に働いていない。半刻ほどで立てるようになる。それから説明をしようと思うが、何か不都合はあるかね」
「構わん」
あっさりと頷くと、少年は再び絡繰の周りを歩き始めた。
その背を見送り、男――クロースはやはり無感情のまま口を開く。
「変わった現地人だ。この状況で取り乱さぬとは」

∞

とある通信記録――

「間もなく目標に追いつきます。時代と場所は特定できませんが、同じ位置に出現する事は可能です」
『対象に動きはあるか？』
「ありません。少なくとも銃鮫の機体は沈黙したままです。自己修復機能も完全に働いていないのでしょう」
『よし、対象を発見次第、すみやかに回収しろ。【３３番】の回収は３００年の悲願だ。君達がこの任務を完了させられることを光栄に思え。そして、それだけの任務である事を肝に銘じろ。決して油断をするな。……奴らは、歯が一本だけになろうとこちらの喉を食い破ろうとするからな』
「了解しました」

「間もなく、次元層を突破します。３、２、１……」

∞

山中

最初にその異変に気付いたのは、巨大な絡繰の上部を見上げていた少年だった。
「……？」
空が光を放ったかと思うと、あまりにも唐突に、空に純白の船が出現したではないか。
『それ』は決して少年の知る『船』と同じ形をしていたわけではない。
だが、水に浮かんでいるのがもっともしっくりと来る外観をしていたからそう判断したにすぎない。
大きさは、谷間に転がる巨大な絡繰りと同じぐらいだろうか。少なくとも、少年の知る船の中で最も巨大なものに匹敵している。色は無骨な鉄色をしており、明らかに人の手によるものなのだが、少年の時代の人間から見れば、人以上の何かの力によって作られたと考えてもおかしくはないだろう。
そして――その船のような何かの影から、巨大な人型が現れた。
「ほう」
一目見て、少年はその人型が、谷間に転がるものと似たような存在であると理解した。
外観は大きく異なるものの、質感や大きさ、全体の雰囲気などからそう判断する。
「あれはやはりだいだら坊の鎧か？　中の面を拝んでみたいものよ」
常人ならば腰を抜かしてもおかしくない状況で、少年は腕組みをしたまま微動だにしない。
一方で、少女は狂ったように笑いながら叫び始める！
「ヒハハハッ！　あー！　あいつらだ！　お終いだね！　もうお終いだねお終いだよどうしよっか？　でもお終いは寂しいし嫌だからどうにかしなきゃね！　ねえねえそこのお兄さん、ここから出るのを手伝ってくれないかな？　ヒハハッ！」
少年は暫し空の船と巨人に目を向けていたが、ゆっくりと少女の元に向き直り、苦笑しながらその上半身に手を差し伸べた。
「普通は、出会って最初にそれを頼むべきだろう」
「そっかな？　まあいいや！　えーと、思いっきり引っ張ってみて？　上半身ぐらいなら千切れちゃっても大丈夫だから」
物騒な事を言う少女に対し、少年は得心が言ったという顔で力強く頷いた。
「ほう、やはりモノノケとは丈夫なのだな」

∞

少年が少女の体を引き抜こうとしている最中、鉛色の船はゆっくりと地上に近づいていった。
船の側面につけられた三重の扉が開き、中から黒いボディアーマーに全身を包んだ男達が降りてくる。
タラップもなにも無いが、どのような仕組みになっているのか、アーマーが僅かに光りを発したかと思うと、紙風船のようにゆっくりとした速度で地上に舞い降りる。
「……あれだな」
「わざわざ身動きが出来ない状態で出迎えてくれるとはな」
フルフェイスのコンバットヘルメットのような物を被っており、ガラス面から覗くのは通常の人間の顔。しかし、その手には妙な銃のようなものを持っており、何も知らぬこの時代の者達から見ればそれこそ妖怪の類に見える事だろう。
「油断するな。……横にいるのは現地人か？」
「恐らくここは中世の日本だな。一応翻訳機を調整しておけ」
男達は互いに顔を見合わせると、三人で固まったまま、潰された少女とそれを助けようとしている少年に近づいていった。

∞

その気配を察したのか、少年は少女を引き抜く手を止め、ゆっくりと背後を振り返る。
「ん……あの船の持ち主か？」
尋ねかけた少年を無視して、男達の一人が少女の横に立ち、その頭を思い切り蹴りつけた。
「きゃんッ！　ヒハハハ！　痛くないけど心が痛いよ？　御挨拶！　御挨拶だね！　ヒハハ……キャンッ！」
再び少女の顎が蹴り上げられ、奇妙なかぶり物の中から野太い声が聞こえてくる。
「――――。――――――」
少年の知らない言語だった。
だが、強い蔑みの感情が込められていた事は理解できる。
男達は少年の事など眼中にないといった様子で、少女の周りで何事かを囁きあっていた。
次の瞬間、男達の一人が銃を構え、まだ千切れていない少女の左腕に狙いを定める。
だが――
「これは、新しい火縄の型か？」
その銃の先端を握り込み、狙いの先を少女から反らす少年。

それに気付いた男が、慌てて少年の手を振り払おうとするのだが――
――……ッ！
――……ッ？　う、うごか……ッ！
「小僧、邪魔だ」
別の男が少年を追い払おうと吐き捨てるが、当の本人は何食わぬ顔で言葉を返す。
「ほう、言葉が通じるのは何よりだ」
「邪魔だと言っているぞ？」
苛立ちを隠さずに告げるが、少年は男達の外装を見て、ただ不敵に笑うのみ。
「珍しい鎧だ。斬新ではあるが、華がないな」
「……邪魔だと言っている。そんな事も理解できないのか？」
すると少年は、不敵な笑みを浮かべながら、男達を静かに睨み――
「邪魔しているつもりだが、そんな事も理解できんのか？」

「……ッ！」
異形の兵は、自分達が一歩下がっている事に気がついた。
既に少年は銃の先から手を離している。だが、動きが固まってすぐにそれを構え直す事ができない。
気圧されたのだ。
目の前にいる自分達の半分ほどしか生きていないような少年に。
その事実を認める事ができず、思わず男の一人が叫ぶ。
「我々は貴様らの国の住民ではない！　口を出さないで貰おう！」
自分達の正当性を主張し、眼前の少年への精神的優位を勝ち取ろうとしているのだろう。
少年は相手の言葉にふむ、と頷き、谷の上空に浮かぶ巨大な鎧と、その下に浮かぶ船を見てから言葉を紡ぐ。
「なるほど。確かに……見るからに異国の者だな。いや、この世のものとすら思えぬ」
「少しは知恵が回るようだな。これから起こる事はすべて我々の事情、我らが理（ことわり）だ。部外者は黙っていて貰おう。その方が身のためだ」
「確かに、その男と小娘がお前達の理の中で何をしたのか俺は知らん。貴様らには貴様らの事情があるのも確かだ」
少年は納得したように頷いていたのだが――背後で潰れている少女にちらりと目をやり、苦笑しながら首を振った。
「だが……ここは貴様らの住まう土地ではない。貴様らの道理が通じる領地（くに）ではない」

腰の得物に手をかける事もなく、腕を組んだまま朗々と言葉を述べる。
少年らしさの欠片も無い、魔物のような威圧感で――子供らしい我が儘を口にした。
「そしてなにより、貴様らが立っているのは、我が目に映る景色の中だ。貴様らの事情に従う理(ことわり)など、俺の中には欠片も無い。このモノノケの小童を殺すならば、俺にその事情とやらを包み隠さず話してからにしてもらおうか」
「なッ……！　く……！」
あまりにも泰然自若とした振る舞いに、男達は思わず顔を見合わせる。
「なに、事情を話せと言っているだけだ。納得できる理由なら我が身のふりかたも一考しよう。例えこの娘が親殺しの罪人だったとしても、その事情を御主らの口から聞くまでは、この上総介(かずさのすけ)、ここを引くつもりは微塵もない」

男達の一人が、少年に引く気がない事を理解し、銃を構えながらヘルメット内の通信機に語りかける。
「チーフ、どうしますか。話は聞いていたでしょう」
すると、通信機の奥からは冷徹な声が帰ってくる。
『現地人に事態を納得させるヒマなど無い。クロースが自己修復を終える前に黙らせろ』
「先刻のような戦闘中の流れ弾ならともかく、この状態で現地の資源を勝手に殺すと、管理課の連中が五月蠅そうですが」
『どうせ、この時代のこの国から釣れる物などもう何もない。管理課もそれは理解しているだろう。最悪その世界を滅ぼしても構わん。クロースと……最悪でも３３号だけは回収しろ』
「了解」

通信を終えた男が、ニヤリと笑いながらカズサノスケと名乗った少年に銃を向ける。
「交渉は決裂、お前はリリースされずにここでミンチだとよ、雑魚が」
今し方まで気圧されていたのが嘘のように、排除許可が出た事で精神的な優越巻を感じ取る兵士達。
彼らとしては事情を知らぬ少年を殺すという罪悪感より、命令外の事をしてしまって『管理課』とやらに絞られる不安の方が大きかったようだ。
そして、やっと安心して引き金を絞れると思った瞬間――
「何を言っているのかは解らんが」
その声は、男の耳元から聞こえてきた。
――あえ？
刹那、トン、とヘルメットの横を叩く音が聞こえ――
それが、男の最後の意識となった。

「殺気だけは良く解った」
少年の言葉と同時に、ビシャリ、という音が響き、男のヘルメットの内側が赤く染まった。
口と鼻、目と耳から血を噴き出した男は、頑丈な鎧の中でピクリとも動かなくなる。

「な……何をした貴様！」
他の二人からすれば。何が起こったのか欠片も理解できない。
少年がヌラリと銃の横を擦り抜け、男の頭に至近距離から掌底を当てた。
彼らの目に映ったのは、ただそれだけの光景だった。
「鎧だけではない」
呆気にとられた男達の前で、少年の姿が揺らぐ。
実際に歪んだわけではないが、まるで蜃気楼が消え去るような錯覚を覚え――
ヘルメット内のセンサーが背後に反応を示したが、その事に気付いた時にはもう遅い。
背中に衝撃が走り、それが背骨を伝って増幅全身に増幅して伝達する。倍、十倍、百倍へと膨らみながら、衝撃は男の全身の神経を破壊した。
「貴様らには声にも、動きにも、魂にすら華がない」
糸の切れた人形のように倒れる男を見下ろしながら、少年は淡々と言葉を吐きかける。
「それでは戦に勝てん」
「な……なんだ……？　何なんだお前は！？　どうやって……どうやって二人を……化物か！」
ヘルメット内の液晶に浮かぶ表示は、仲間の二人の生命反応が消えている事を示している。
一方、人を死に追いやったばかりだというのに、青年は不思議そうに首を傾げ、男の問いに答え始めた。
「何も特別な事はしていないぞ？　戦場では俺より強い奴などごろごろいたしな」
あっさりと答える少年に、最後の一人となった男は、銃を乱射しながら上空に浮かぶ巨影に視線を向ける。
「ファグ！　通信は聞こえてるだろ！　こいつはヤバイ！　こいつを殺せ！」
銃の先端からは色のない刃が放たれ、遠くの木の幹を派手に切断した。
だが、少年の姿はその射線に存在せず――
やはり、男の背後から声が響く。
「ほう、その火縄は見えぬ刃を飛ばせるのか。中々に便利だな」
「……ッ！」
「だが、殺気を隠さなければ当たる筈がなかろう」
その言葉に、男は完全に恐怖を覚え――今更どうでも良い事に気がついた。
――ファグの奴は、多分翻訳機使ってねえ！
そして、通信機越しに、翻訳機を通さない普段の言葉で上空の巨影に叫びかける。

「【ファグ！　何をしてる！　このガキを殺ッ……】」

その言葉が、途中で遮られた。

この時代に作られる鎧より、何倍も丈夫な――それこそ戦車の装甲クラスの耐久度を持っている。

そして――その肩口に、少年が抜きはなった刃が置かれていた。

斬りつけたわけではない。

ただ、置かれているだけだった。

それなのに、刃は徐々に男のボディアーマーへと沈み込んでいくではないか。

少年に殺気はない。

ただ、これから自分が死ぬであろうという事実だけが感じられる。

男はどうしようもない絶望に身を包まれ、腰から引き抜いたナイフで背後を突きながら、通信チャンネル全てに向かって叫び上げた。

「【畜生！　なんでこんなタイミングで……！　３３号の奴ら、狙ってここに来たのか！？】」

「【このガキ……いや、この世界……『特異点』……だッ……】」

結局、言葉は最後まで叫ぶ事ができたものの、ナイフの先端が少年に届く事はなかった。

その前に、男の腕が圧し切られ、ナイフごと地面に転がる結果となったからだ。

「思い出した！　思い出したよ！　ヒハッ！」

目の前の戦いを見つめていた少女――ササメは大声でそう叫んだ。

「何をだ」

いつの間にか、少女の脇には黒衣の大男が佇んでおり、兵士達の屍の中心に立つ男に視線を向けている。

「あれれれ？　大丈夫なのクロース？　元気？　死んでない？　ヘヒハハハ！」

「やっと立てるようになった所だ。……あの少年に助けられたな。で、何を思いだした」

「ああ、そうそう！　あの子！　あの子ね！　前に別のいくつかの世界でも見た事あるよ！

その時はもっと年とってて、なんとか魔王って言ってたり、なんか友達に裏切られて燃やされてたり、何百年か後に復活して本物の魔王様になっちゃったりしたけど！」

少女の言葉を聞き、クロースは改めて少年の顔を見つめ――

「ふむ、面影はあるな。それに先刻の名乗り……」

何か呟きかけたクロースだったが、それを遮ったのは当の少年の声だった。
「おお、立てるようになったか。無事ならばなによりだ」
刀の血を振り払いながら、強気な笑顔を向ける少年。
その刀を見て、少女は再び無邪気に笑う。
「あー、わかったよ？　わかっちゃったよ？　それが、『圧し切り長谷部』ってやつ？　すごいね、すごいね！　押しただけで切れちゃうんだもんね！」
「？　……この刀は無名だが……。そういえば、まだ名前を聞いていなかったな」
少年の問いに、少女は残った左手をパタパタさせながら答えた。
「私はササメ！　えーと、君は、カズサノスケだから……カズサね！」
「まったく、馴れ馴れしいモノノケがいたものよ」
まんざらでもない表情で呟く少年は、続いてクロースに目を向け、口を開く。
「話を聞くという約束だったが……」
続いて、自分の背後に目を向ける。
そこには、地上に降下してきた巨影が、今まさに谷底に足をつけようとしている姿があった。
空気を軋ませ、奇妙な稼働音を振りまくその巨影は、それだけで山の空気を殺し続ける。
だが、やはり少年は動じた様子を見せぬまま、血を払ったばかりの刀を右手に、そして、左手には先刻の兵士が持っていた【火縄】を手に、どこか楽しげに微笑んだ。

少年の口元に浮かぶ、あまりにも鋭い笑み。
それを見て、ササメは心を躍らせながら空想する。
この世の全てを喰らい尽くす蛇鮫神（ウロボロス）。
もしもその巨大な顎（あぎと）が笑うとしたら、きっとあんな顔なのだろうと。

「とりあえず、あのうるさいデカブツを黙らせるとしよう」

続きとなる一章のクライマックスは、
ノベライズ本編の発売をお楽しみに！